
眠り姫の住む城

ジェルミサ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

眠り姫の住む城

【Nコード】

N8757T

【作者名】

ジェルミサ

【あらすじ】

ヒロユキおじちゃんとトーコと私。大切な思い出の家。

前編

私は来週、18年暮らしたこの町を出る。合格した大学に通うのだ。家から通える大学を選ぶ事も出来たのかもしれないが、どうしても家から出たかったから県外の大学ばかり受験した。合格出来て良かった。

「かなちゃん、もっかい準備したとば確認しときいよ。後から電話で何が足らん、あれも足らん言ってきたもお母さんは知らんけんね。家ば出るって事はそげんことよ。明日美姉ちゃんやったら、言われる前に何でもしよったとに」

「わかっとうよ。もう荷物の準備げなほとんど全部出来とうと。お母さんは黙っとうて」

「まーたそげん口聞いてからくさ。ほんにこの子はいやらしか」

お母さんが私の心配をしてくれて色々言ってくれているのは分かっている。でも、それならどうしてもっと優しい言葉じゃないんだ。甘やかすと子供はまっすぐ育たない、なんて間違ってる。お母さんは知らないだけで、明日美姉ちゃんは東京の大学に行ってるからおびのび暮らしているのだ。今は一つ下の彼氏と同棲までしている。お母さんがこの事を知ったら寝込んでしまうに違いない。自慢の長女が！ってさ。お母さんの中では結婚前の男女が一緒に暮らす事はとんでもなくふしだらなのだ。お母さんは昭和が一番良かった、と信じてるタイプ。

明日美姉ちゃんからは昨夜も電話があった。

「かな、家ば出れば好きにやれるっちゃけん、もう少しだけ我慢しときいよ。今何か面倒な事ばやらかして監視されるようになってん、

家は出た方が面倒くさかったって事になるかもしれないっちゃけんね」「だって最近本当に頭くるっちゃもん。マジでお姉ちゃんが家は出てから本当に最悪っちゃんね。やっと出れるけん、嬉しかあ。お姉ちゃんもようあげん今まで上手に我慢しとったねえ。あの頃のお母さんが今おったらぶちきれとうもん」

「要領よくやった方がいけけんね。私がこずるかったけんあなたには迷惑ばかりかかもしれんけど」

「なあん言いようよ。明日美姉ちゃんがおったけん、私も家を出てから県外の大学とか行けるっちゃやない。先に優秀なのがいいお手本ば作ってくれとうけん良かったよ。そうでなかったら絶対に県外へ進学げな出来んかったけん」

それからしばらく普通のおしゃべりをした後、急に明日美姉ちゃんは真剣な声で言った。

「町は出る前に気になる所は全部行つといた方がいいよ。特に、ヒロユキおじさん家。あそこ、とうとう取り壊すかもしれないって」

ヒロユキおじちゃん。その名前を聞くと一瞬時間が止まってしまった。あの時から、何度でも。

「ヒロユキおじちゃん家が？何で？」

「久子おばちゃんが、あそこにアパートみたいなんば建てたいらしいよ。もともと取り壊す話はかなり前から出とったっちゃけど、伸び伸びになつとったとよね。でも、そろそろ本当に決まるらしいけん。」

あなたが夏休みに帰った時にはもうないかもしれない。私も昼間由紀子ちゃんから久しぶりに電話があつてから、そんな時に聞いたっちゃん。

かな、私もあれ以来1回も行つとらん。バイトが上手く休めれば帰って見に行くかもしれない。バイト先で怪我して入院した子がおるけん多分無理っちゃけどね。シフト今めちやくちやもん」

ヒロユキおじちゃん。もう何年も記憶の中に封印してきた名前。その特別な名前に胸がうずいた。

翌日さっそく、久子おばちゃんの家に行き、ヒロユキおじちゃんの家のカギを借りた。おばちゃんは留守だった。代わりに妊娠9ヶ月で里帰り中の由紀子姉ちゃんが重たいお腹で出迎えてくれた。

「何か久しぶりやねえ。あの家の事、明日美ちゃんから聞いたつちやる。私もおととい家に帰ってきてからお母さんに聞いてびっくりしたとよ。もともと眺めがいいけん、売ってくれっていう話は何度もあったつちやけど、まさか今更取り壊すとは思わなかったあ」

由紀子姉ちゃんは昔から察しのいい人で、カギを私に渡す時に、ウインクした。

「好きなだけ借りつつっていいけんね。また昔みたいに入りびたつときい。かなちゃんに貸すんやつたら家のお母さんも何も言わんやる。やけど、もう来週にはあっちに行くつちやる？忙しかねえ」

私が頷くと、由紀子姉ちゃんもにっこりした。

「赤ちゃん、楽しみにしとうけんね。すぐには無理かもしれんけど、夏休みには絶対帰ってくるけん、そんな時いっぱい抱っこさせてね」

「分かった。私も帰って来るとば楽しみに待つとうけんね。大学生活ば思いつきしエンジョイしてきいね。寂しくなったらいつでも電話ばして来ていいけん。由紀子姉ちゃんの携帯は常にマナーモードでかなちゃんの電話ば待つとくけんね」

「そげん事しとう暇げななかるーもん。赤ちゃんは24時間寝たり起きたりするつちやる。よかとよ。寂しかったら手紙ば書くけん。カギ、ありがと」

久子おばちゃんが急にヒロユキおじちゃんの家の方分を考えたわけではなかった事に、何となく安心した。昔から久子おばちゃんは

お世辞にもおじちゃんを好きそうではなかったから。だから何か暗い理由で取り壊しのような事になったのではないかと思っただの。恨みとか。「お金になる」って話だったらどんなに私があの家を好きでも持ち主の久子おばちゃんに文句も言えない。確かにあの場所が高く売れそう。今まで売らなかつたのが不思議なくらいだ。実の兄妹で憎み合うというのは悲しい事だけど家族の分だけ色んな形があるのだ。家だつてよその事なんか言えない。久子おばちゃんがいつからヒロユキおじちゃんを嫌いなのは分からない。もしかしたら大人になってからかもしれない。そうなるなら明日美姉ちゃんも私だつていつかいがみ合う可能性がゼロではないのだ。今のところ全く想像出来なくて良かった。私が明日美姉ちゃんを嫌いになるという事は確率としてもものすごく低いので、嫌うとしたら明日美姉ちゃんが私を嫌いになるって事だ。その確率はそんなに低くないかもしれない。小さい頃から迷惑を散々かけた事実が消えやしないから。

ヒロユキおじちゃんの家は町の高級住宅地がある丘にあった。丘のてっぺん近くと言つてもいい位置だ。急な坂道を登つていくと、だんだん道路が広くキレイになっていき、そこら辺りまで来ると大きなお屋敷が沢山並んでいるのだ。高級車もよく見かけた。ジヨギング中のおばさんのジャージ姿ですら洗練されている感じがしたものだ。私の中ではその場所は小さなニューヨークだった。私がそう言つたらヒロユキおじちゃんは楽しそうに笑つたつけ。

小さなニューヨークを抜けて、まだ更に上に行くと、古い家並みが並ぶ。どの家にも手入れの行き届いた大きな庭があった。外国人の観光客が訪れたなら、「オー、ワンダフル！」って言っちゃうだろう。そのくらいその辺りは「日本」って感じだった。せちがらい世の中から切り離された「古き良き日本」で、その中にヒロユキおじちゃんの小さな洋館の家があった。中心と言つてもいいくらいの場所にちんまり存在していた。ヒロユキおじちゃんの庭は周りに

比べると小さかったけれどバランスが取れていた。

空想好きな私にとってその家は眠り姫のイバラの城だった。イバラの代わりにいい感じに壁にはツタが絡んでいて、それはうっとりする光景だった。この年になってもあの家の素晴らしさを表現する言葉が見つからないのが口惜しい。現実の中にふわっと現れたファンタジーの世界のなのだ、あの家は。

子供の頃毎日のように通っていた時にはそうでもなかった坂道が、18歳の私にはやけにきつかった。…いや、あの頃もきつかったわけ。

「ヒロユキおじちゃんは何げんきつい坂道ば歩くの嫌にならんと？私はいんどかあ」

私がいざいざ息を切らしながらたどり着くと、おじちゃんは笑いながら色んな飲み物を出してくれた。それは紅茶だったり、カルピスだったり、カフェオレだったり。とにかくいつもお洒落な飲み物だった。ヒロユキおじちゃんの出してくれる飲み物は普通の麦茶ですら、家の麦茶とは何かが違った。香ばしいその匂いで初めて私は麦茶を美味しい飲み物だと知ることが出来たのだから。一度意識するとお茶の香りというのはどうしてそれまで気がつかなかったのか信じられないくらい鼻を刺激する。それは幼児にだって分かる違いだった。

洋館と言ってもヒロユキおじちゃんの家は完全な外国の家ではなかった。畳の部屋もあった。外国の人が日本に建てた家でもなかった。外国に住んだ事のある日本人が外国を懐かしんで建てた家だったらしい。いつか誰かがそのような事を言っていた。

私があの家を眠り姫の城だと考えたのには訳があった。本当に眠り姫がいたのだ。決して起きる事のない眠り姫。それは一つの人形

だった。小さな、しかし精巧な作りの日本人形。

その人形の名前は「トーコ」と言った。

トーコは黒い肩までのまっすぐなおかつぱ頭の、本当に美しい人形だった。私は初めてトーコを見た時に感じた自分の中が透明になっていく感覚を忘れる事が出来ない。

桐のタンスの上がトーコの指定席でトーコはいつもそこに静かに佇んでいた。

今ではヒロユキおじちゃんの名前は私の家では禁句になっている。「トーコ」という名前も。瞳子という名はかつて私の名前だった。

名づけ親はヒロユキおじちゃん。だが、私が10歳になったある日、おじちゃんが私の家を訪れて宣言した。

「トーコの名前を返してモラウよ。おチビちゃんには新しい名前をつけるトイイ」

おチビちゃんと言うのはヒロユキおじちゃんが時々呼ぶ私のあだ名だった。思いがけないヒロユキおじちゃんの発言にお母さんもお父さんも激怒し、大喧嘩になった。明日美姉ちゃんの記憶では私の出生時に名前をつける時にも大分悶着があったらしい。

「今さら何ば言いようですか、ヒロユキさん。あんたがごん子に名前ばつけるて言うたとでしようが。私らが用意した名前ばやめさせてまで無理ば通したとでしようが！あんたが言い張ったとよ。ほんにおかしき事ば言いよるよ。大体が戸籍とか色んな問題がありましようが。冷静に考えてもどげんもこげんもしよんのなか！」

あの頃はまだお父さんが家にいた。ヒロユキおじちゃんは激怒しているお父さんの事に全く動じなかった。ヒロユキおじちゃんは沢

山の書類をお父さんに渡すにつこり笑った。

「コレカラの手続きは弁護士と相談してください。私にはモウ時間がありませんノデ」

…記憶が途切れ途切れだ。それからどれくらい経ってからか、案外大して時間はかからなかったような気もするが、私は瞳子から今の名前の「かな美」になった。名前が変わるのはおかしな経験だった。小1の時からずっと私のあだ名が名字から来た「まっちゃん」だったのが幸いしたのか深く追求されなかったのは幸いだった。高校を卒業した現在、今の仲良し達は私の名前が変わった事なんか知らないコが殆どだし、知ってるコも忘れてるかも。少なくとも本人の私ですら考える事が殆どないくらい改名は私の中で問題じゃなかった。

「おじちゃん、何でトーコと私の名前ば一緒にしたと？赤ちゃんの時の私がこげんかわいかつたけん？」

今思うともものすごく厚かましい質問だが、幼稚園生の私は無邪気に尋ねた。ヒロユキおじちゃんは困った風に微笑んだ。

「同じ名前はイヤかな？」

「ううん、嬉しい。トーコの事、すごい好きっちゃんもん」

「ソウか。良かった。…大事な名前なんだヨ」

名前を返してもらってどういうことだろう。おじちゃんは何がしたくて私に瞳子と名付けたんだろう。それは最初から取り戻すつもりで？それとも私とその名前に値しない人間だったから？

後編

埃のうつすら積もった懐かしい部屋の中で私が記憶の扉を少しずつ開いていた時、現実に戻す携帯電話がポケットの中でブルブルと振るえた。バスに乗った時にマナーモードにしたままだったのか。エリからだ。

「もしもし？」

「まつちゃん？私。今どこにおるとお？今ね竹中くん達に会ってからね、何か話しよるうちに今から竹中くん家に集まる事になったっちゃけど、まつちゃんも来れん？なんかね、杉山達とかも呼ぶけん、早いけどプチ同窓会みたいになるかもしれんと。ちよお、待ってね、今みきちゃんと代わるけん」

「まつちゃん？絶対楽しいけん来いよ。うちら今まだ新天町におるっちゃけど、まつちゃんが来るなら、うちらだけこのまま天神で待つとくけん、一緒に行こ。他にも誘うっちゃけど、誰ば呼びたい？まつちゃん来られる？」

電話の向こうのざわめきと友達の弾んだ声が静かな部屋にいた私の耳には異世界のように聞こえた。眠り姫のいなくなったイバラの城から現実世界は驚く程遠かった。胸が痛い。何故か泣きたくなかった。

「…ごめん。今ね、ちょっとバタバタしとってから行けんみたい。

ごめんね、せつかく誘ってくれたっちゃけど」

「えー、来れんとー？ねえ、まつちゃん来れんげな」

「うつそ、何で」

電話の向こうで何人かの話声がした。卒業したばかりの友達の声。仲が良かった男子グループと偶然出会うなんてすごいな。確かに今

日を逃せばもう当分会えないかもしれない。杉山とは高2の時だけ同じクラスだったけど、多分高2の時の同窓会なんて今後開かれる可能性ナイもんな。受験末期から話してなくて卒業式も結局バタバタと写真撮っただけで話せてないんだよね。

「まっちゃん？」

「ん？」

びっくりした。竹中くんだよな？みきちちゃんの声が急に低くなっただかと思っただ。

「オレ。オレン家分かるやろ？来れそうになったら来い。待つとうけん。お前ももうすぐ福岡からおらんくなるっちゃん、会いたがっとうやついっぱいおるっちゃんさあ。こげん沢山集まるのげな多分最後になるやん」

「うん、そうやね。分かつとう。ごめんね。行けたら行くけん」

「おう。じゃ」

「まっちゃん？みきちちゃんね、今日佐藤さんの家に泊めてもらうことなっとうっちゃん。やけん遅くまででも待つとうけん、無理はせんで良かけど、来れそうやったら来てね。電話して。駅まで迎えに行くけん。何時でもいいよ。まっちゃんも泊まれそうやったら泊まっつていいけん。いいよね？…いいって」

思わず笑った。

「勝手に決めていいと？佐藤さんもそこにおると？」

「おらんけど、みきちちゃんがいいって言ったけん、よかるーや。じや、また後でね」

電話を切るといつそう静かになった。友達に会って一緒に遊びたい、という欲求もあった。でも、今はこの家にいたかった。友達とはいずれまた会える。すぐじゃなくても何年後かに。多分成人式とか、本当の同窓会とか。けど、この家は確実にもうすぐなくなってしまうのだ。なくなってしまうと見られないのだ。こんなに大好きなのに。

眠り姫のいなくなったイバラ姫の城は静かだった。そして寒かった。私が足しげく通った時期は春から夏の終わりだったから冬のこの家の事は殆ど記憶にない。冬になるとおじちゃんはトーロを連れて外国に行ったきりになる事が多かったからだという事を急に思い出した。

ヒロユキおじちゃんの私物は処分されたのだろうか。何か残っているような気がしてそれが見たくなかった。あの頃のモノ。

「これって泥棒になるとかいな」

私はあまりの心細さに思わず独り言を言いながら、ダンスの引出しに手をかけた。中身は思ったとおりまだあった。どの引出しの中身も多分ヒロユキおじちゃんが使っていた時のままなのだろう。中身はぎっしり詰まっていた。引き出しを開けただけなら罪じゃないよね。親せきの家だからギリOK？

きれいに整頓された衣服が何だかわいらしかった。久子おばちゃんの性格上、処分したくてもしきれなかったに違いない。多分この家を取り壊す時に張り切って何もかも捨て去るつもりだろう。おばちゃんは一度動くと思いい切りがいいのだけれどそれまでは何事にも躊躇する所があった。この家が今まで処分されなかったのはそういうわけかもしれない。時期が来たんだろう。実家を出る私のように。何もかも時期なだけなのだ。

家の中のおちこちに、いなくなった主人を懐かしむ空気が流れていた。微かに何かの気配がする。これは家自身？それともヒロユキおじちゃん？…違う。何だろう。モスグリーンのポロシャツを着たヒロユキおじちゃんを覚えてる。おじちゃんのお気に入りの服だった。持って行かなかったんだな。

私は他の足跡を求め、2階への階段を登った。踊り場のステンドグラスで思わず立ち止まる。コレってこんなにキレイだったっけ？

「このガラス窓はネ、この家を建てた人が異国から持ち帰ったモノ

なんだヨ。当時もトテモ人気があったヨ。ボクはここがスゴク好きなんだ。1階と2階の間って不安定ダケド、ココなら自分を見つけれルんだ。コノ、ガラスの光の中ナラ」

急におじちゃんの声が頭に響いてきて私は息を飲んだ。幽霊とか怪奇現象とかではなく、それは記憶だった。けどあまりにもが鮮明で私は手すりにしがみついた。耳元で言われたようにはつきりとおじちゃんの声がした。

何？何で急に思い出すの？この家に来たから？！

ヒロユキおじちゃんの特徴のカタカナまじりの話し方。きつと文章にはちゃんと残せない話し方。私が遊びに来ても、おじちゃんは私をすぐにほったらかしにして「仕事ダカラ」と2階に行ってしまった。何となく私は後をついていけずに下の和室でトーコを眺めていた。トーコを眺めていると時間はあつという間にたった。夕方のアニメよりもトーコの顔を見ている方が楽しかった。家にいる時はドラマを見たい明日美姉ちゃんとチャンネル争いで涙を流すくらいアニメが見たかったのに。ヒロユキおじちゃんの家にもちゃんとテレビがあつたし、私の家では見られない番組がいくつも見られたのに、私は殆どトーコにへばりついてた。

私はもう子供じゃないからヒロユキおじちゃんの仕事の邪魔にはならない、とくだらないことを考えた。

ヒロユキおじちゃんはもうとっくにいなくなった人なのに、彼への言い訳を考えながら2階への階段をゆっくりと登った。彼のテリトリー。何だろう。誰かの気配がする。ヒロユキおじちゃん？

階段横、一つ目の部屋は客室だった。そのあまりにロマンチックな部屋に昔は気がつかなかつた新たな発見をした。一度もこの家で

会った事はないけどおじちゃんには恋人がいたんだ。間違いない。男の一人暮らしでこんな部屋、いくらここがお城みたいでも必要ないから。この部屋を整えていた女性はとてもセンスが良かったんだろう。その人も外国暮らしをした経験があるのかも。外国のホテルみたいに可愛い部屋だった。

2つ目の部屋は書斎だった。ヒロユキおじちゃんはここで仕事をしていた。あの椅子に座ってた後ろ姿を覚えてる。ヒロユキおじちゃんが何の仕事をしていたのか知らないけどこれだけ本があるのなら学者さんだったのかもしれない。本棚には外国の本から「優しい手紙の書き方」まで色んな本がぎっしり詰まっていた。でも、誰かの気配はこの部屋から感じるわけではなかった。私は自分の勘を信じて書斎を出た。

そして、階段を挟んで左側の部屋のドアノブに手をかけた。鍵がかかっていた。私は書斎に逆戻りして、机の引出しの中をあさった。鍵、鍵。どこかにあるはず。1階も探した。ないわけがない。いや、おじちゃんは持っていったってしまった？でも、それはおかしい。久子おばちゃんにこの家はあげちゃったんでしょ？全ての部屋の鍵を渡していないなんてあり得ない。開かずの間なんて普通の家には必要ないんだから。久子おばちゃんにあげた時点で残したモノは全ておばちゃんの好きになるのは分かっていたはずだ。あのおばちゃんに入れない部屋なんて見せたらドアを破壊して侵入するに決まっている。そんな無駄な事おじちゃんが望む訳がない。

それにしてもどうして踊り場のステンドグラスと書斎の椅子に座った姿しか思い出せないんだろう。二階には何度も上がった事があるはずなのに。あんなに素敵な客室の事ですら初めて入った部屋みたいな気がしたのは何故。幼稚園の頃この家に何度もお泊まりした時、私は1階の和室ではなく2階で眠った記憶があるが、それがどの部屋なのかさっぱり思い出せない。あの客室でないことは確かだ。でも、ヒロユキおじちゃんの寝室で一緒に眠った記憶もなかった。

だとすれば、鍵のかかった部屋で眠ったのだろうか。全く記憶がないけれど。おじちゃんの寝室は書斎の隣のはずだ。緑の壁紙の部屋うん、これは覚えてる。寝室は記憶通りで、やっぱりそこにも鍵はなかった。

部屋から部屋、引き出しから引き出しへと鍵を探しながら移動するうちに私は青くなった。普通の家にはあるはずのアレがないことに気がついたからだ。何年も人が出入りしなかった家なら当然あるはずのアレが全くない。私の部屋にも気がいたら存在するアレがない。

家中、たった今磨き上げられたばかりのようによどの部屋にもホコリがなかったのだ。いや、違う。さっきまで確かにあった。だって私は空家独特の埃っぽい湿った空気を嗅ぎながらこの家の玄関で靴を脱いだもの。スリッパを脱いで和室に入った時、靴下が汚れるかなとぼんやり考えたもの。

私はきよろきよろしながら、だんだんとパニックになっていた。この家は何かがおかしい。何もかもがおかしい。実は私は眠ってしまったとか？本当はヒロユキおじちゃんの家ではなくて自分の部屋のベットで寝ているのではないだろうか。

ようやく玄関のクツ箱の中で鍵を見つけた。洋館に相応しい凝った作りの鍵。玄関の力ギよりも小ぶりで、もつとずつと凝ったデザインの鍵だった。何でそんな場所に隠すようにして鍵が存在するのか理解出来なかった。

私は自分のクツを履いてそのままヒロユキおじちゃんの家を後にする事も出来た。が、私の心は決まっていた。

私は鍵を握りしめ、眠ったままのお姫様を揺り起こす為に2階への階段を上がっていった。そこに私がずっと眠らせてきた何かがあるのだ、きっと。

後編（後書き）

主人公がこの後異世界トリップするパターンとヒロユキおじちゃんの恋の話バージョンを続きとして書こうかな、と思っていたのですが、脳内で楽しんでるうちに大まかな設定を忘れてしまったので、続かないままです。

続きそうな終わり方をしてるのは書いた当時は続きを書く気満々だった名残でしょう。

かな美ちゃん達若者が使う博多弁は現在私が使うような言葉で、お母さんのはちよっと懐かしい博多弁です。お父さんの博多弁は現在70歳以上の博多ツ子じゃないとなかなか使わない表現を入れてます。分かる人にだけ面白い部分ですが、文字で見ただけでは分かりにくいでしょうか。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8757t/>

眠り姫の住む城

2011年10月8日23時18分発行